

「人々を勇気づける歌、元気
づける歌を、多くの人たちに
届けたい……」
そんな思いで『おしゃべり
コンサート』と題したりサイ
タルを始めたから、26年の歳
月がたつ——。この日は、秋らしさを感じ

る、ちょっと肌寒い9月下旬の午後7時。千葉市民会館は中高年の女性を中心近くで多くの観客で埋め尽くされていた。広々としたステージ中央には、グランドピアノと2本のスタンダードマイクだけが置かれている。

そこに伴奏者の肩に手をのせ、ゆっくりとエスコートされながら、ひとりの男性歌手がステージに登場した。スポットライフルで浮かび上がるその姿は、中背だが身に纏つた黒いタキシードの外からでもはつきりとわかる厚い胸で、

量と魂をつかむような深い歌声が響き渡り、聴く者の心を

その立派な体格から、風格を挿さぶっていく。左手に持つた点字の譜面を指先で滑らせ、ながら歌う、その男性の名は

——テノール歌手・新垣勉さん(54)だ。

新垣さんは、1歳のとき

生きてきた。

3曲目を歌い終えると、新垣さんのおしゃべりが始まつた。

「みなさん、こんばんは。

『バンカチ王子』が話題になつてますが、僕も昔からハン

カチを使ってまして。だから

『バンカチ親父』なんて……

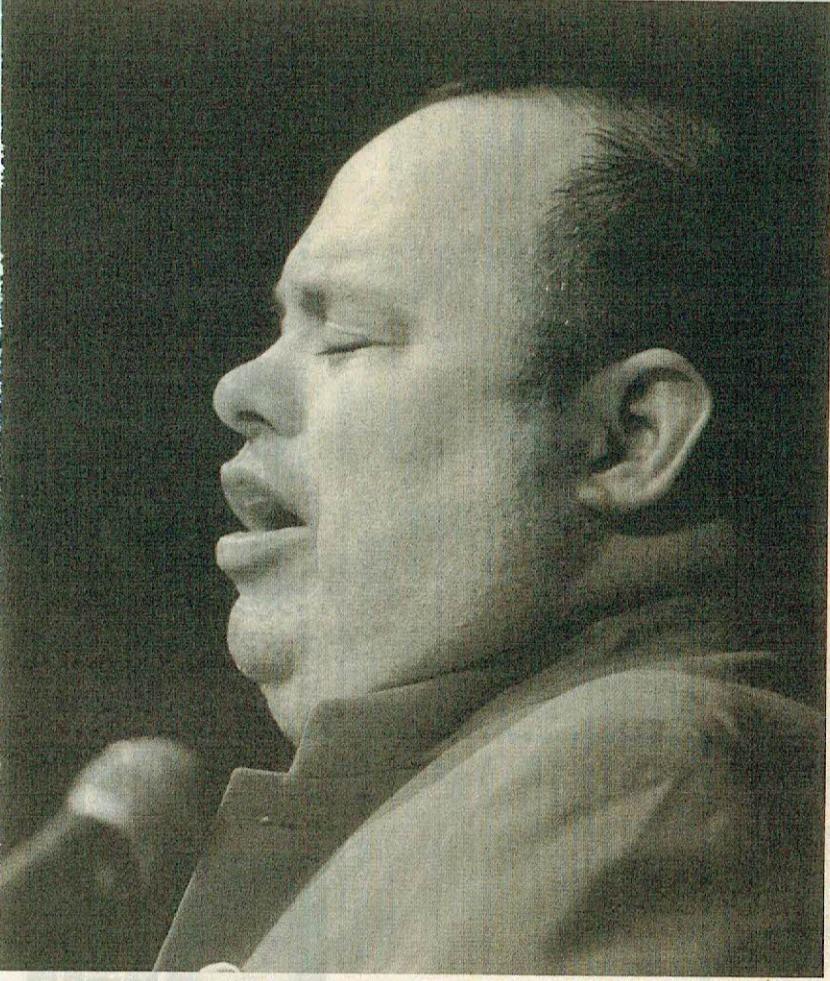
『家でカキ氷を食べながら高校野球を見てたら、バッタ

ー』が『カツキン』と……」

なんと飛び出したのは、先ほどまでの莊厳な歌声とは打って変わった、茶目っ氣あふれのダジャレの数々。会場がドッと沸く。気がつくと、誰しもが『新垣ワールド』に引き込まれている。そしてコンサート後半は、さまざまな自らの体験談を通して生きることの大切さを説いていく。

「人というのは、みんなそれぞ違つていて、それでいいんです。他人と比べるのではなく、お互いの違いを大切にします。ナンバーワンではなく、あなただけのオンリーワンの人生を生きてください」

新垣さんがそういつて結び、最後の歌を歌い終える



オンラインリーウィンの人生を 大切に……

全盲と天涯孤独の不幸を乗り越えてきたテノール歌手・新垣勉さん

「両親と産婆を殺して僕も死んでやる」——やり場のない怒りと絶望、悶々とする日々。しかし、そんな中で音楽との出あいが人生を変えていく。そして、新垣さんは自分にしかできない生き方」を胸に、今日もステージに立つ

と、どこからともなくアンコールの拍手が沸き起こり、会場全体が包まれていく。

アンコールを飾るのは、'01年に発売され、大ヒットを記録した『さとうきび畑』だ。

『さとうきび畑』、
さわわ さわわ さわわ
風が通り抜けるだけ
昔 海の向こうから いく
さがやつてきた

夏の日差しの中で

コンサート開始から1時間半。ハンカチを握りしめ、ぐつと涙をこらえていた女性たちの間から、すり泣きが聞こえてくる。

親交のあるピアニストの木村裕平さん(29)はいう。『新垣さんと出会って6年になりますが、新垣さんのステージは、お客さんの反応を見ながら、その場の雰囲気で曲

を変えていくというライブ感覚なんです。だから、決まったく台本はありません。常に客席とのキャッチボールを大切にしているんですね。それも長年のコンサートで培った、新垣さんならではの魅力だと思いますね』

星条旗がはためき、アメリカが街を闊歩した敗戦後の沖縄。さとうきび畑に囲まれる村の片隅で、ひとりの少年が生を受けた。そして、自分が生を受けた。そして、自分が生を受けた。そして、自分のオンリーワンを目指して、自分探しの長い旅が始まった。

『失明、出生の秘密、貧困、そして祖母の死……』
新垣さんは1952年、沖縄生まれ。メキシコ系アメリカ人の父は、嘉手納空軍基地に駐留する軍曹だった。生後間もなく、助産婦のミスで家畜を洗う薬液を点滴されて実母を年の離れた姉と教えられて育つことになる。がん老年の祖母に仕事などあろうはずもなく、2人にとって生活保護だけが生きる糧だった。

そんな彼を残して再婚。祖母を母と信じ、時折、訪ねてくるが、貧しくとも元気はないつぱいだった。近所の子供たちは一緒に野原を飛び回り、時には肥溜めに落ちたりしながら、自分自身の身体で地形を覚えていた。

そんな新垣少年の楽しみは、錢湯で歌うこと。エンターテイナーとしての出発点がここだった。

『僕が銭湯で歌うと、近所の人からくりエストがきましてね。祖母に見つかって、ご飯を炊く薪で、お尻を思いつづいて呼んでいて笑い』、三橋美智也の『りんごの村』や春日八郎の『別れの一本杉』、そ

れに美空ひばりなんかもよく歌いましたね。気持ちよかつたですよ。なんといつても、音響効果抜群でしたから』拍手や手拍子、『うまいぞ』という声がうれしくてたまらなかつた。家の中にはいつも、ラジオから流れる賛美歌や祖母が歌う民謡があつた。そんなある日、祖母が買い物に出かけていたときのことを。ラジオから流れてくる人の声や音楽が不思議でならないかった新垣少年。

『この中には、すごく小さな人が入っているはずだ。そう思つてクギでスピーカーをこじ開けてしまつたんです。したら大穴があつちゃつて、ご飯を炊く薪で、お尻を思いつづいて呼んでいて笑い』、三橋美智也の『りんごの村』や春日八郎の『別れの一本杉』、そ

敏ない現実と向き合ふことに
なる。6歳のころのことだ。
「朝、近所のあちこちから
『行つらつしやい』『行つ
て来ます』という声が聞こえ
てくる。今まで一緒だった
遊び仲間が、小学校に通い始
めるんですね。でも、祖母は
僕には何もいわない。なんで
僕だけ学校へ行かなくていい
んだ? やつぱり僕は人と違
うんだ、と……」

59年、新垣さんは読谷村を
離れ、半年遅れて那覇市首里
の琉球政府立沖縄盲学校小学
部に入学。寮生活を送ること
になった。

「最初は寂しくて、泣いてば
かりましたね。週末になる
と祖母が寮に迎えに来てくれる
んですが、ある日、祖母は
僕が世話になつている人たち
に食べてもらひたいと、芋の
んぶらをたくさん作ってき
たんです。が、それをバスの
中に忘れてしまつたんです

離れ、半年遅れて那覇市首里
の琉球政府立沖縄盲学校小学
部に入学。寮生活を送ること
になった。

「いつも行進曲(イチニ、イ
チニ)ですよ(笑い)」
そのため2年生を2回やら
されることに。このことが新
垣少年の持つて生まれた負け

ね。誰も欲しがらないよう
貧しい芋のんぶら……で
も、祖母はすつとそれが悔し
かったみたいでね。あのとき
のことは、いまでもはつきり
覚えてますよ(笑)

ところで、学校の成績はどう
うだったのだろうか。
「いつも行進曲(イチニ、イ
チニ)ですよ(笑い)」
そのため2年生を2回やら
されることに。このことが新
垣少年の持つて生まれた負け

ん気の強さに火をつけた。絶
対音感を身につけたのもこの
ころだった。

突然知られたのが「出生の
秘密」だった。

「おせつかいな人がいるもの
で、教えてくれた人は、いつ
か見返してやるんだよ。強く

「おせつかいな人がいるもの
で、教えてくれた人は、いつ
か見返してやるんだよ。強く

が包み込んでいた。祖母は
「お願いだから、やめておく
ぞ」と泣くばかりでねでも、

少年の心の中を激しい憎悪
が包み込んでいた。

「あるとき、実際に助産婦の
家を見つけて、家の前で『中
に入ってくれ!』とわめいた

ことがあります。祖母は

「お父さんに感謝しなければ
ならないね。その声は、努力

して手に入るものではない。

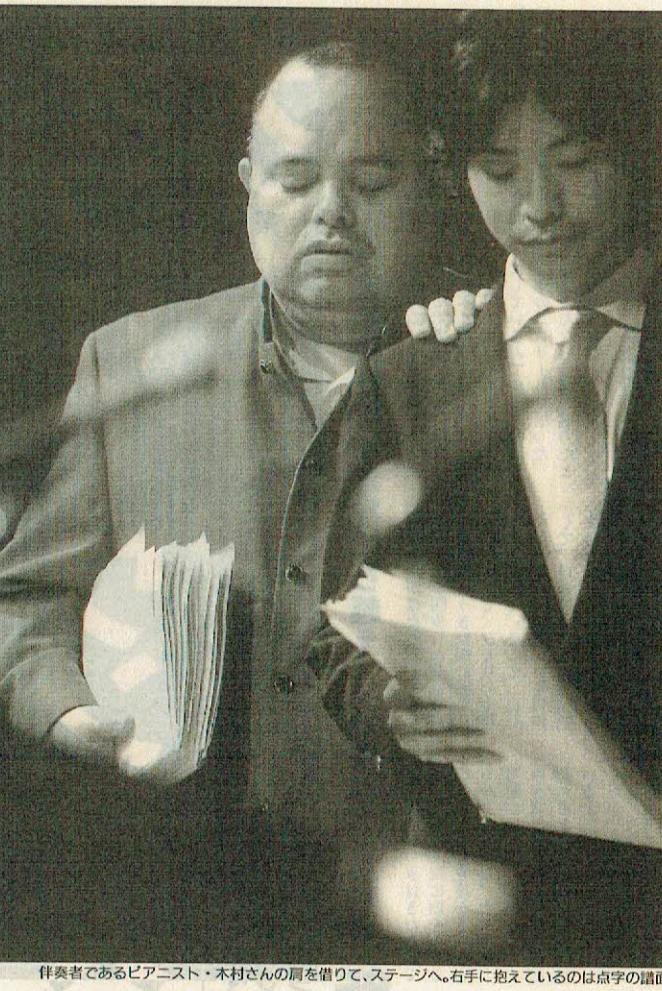
神様からのプレゼントだよ。

君の宝物だから、大切にしな
さい」

「混血」という言葉にコンブ
レックスを持ち続けてきた新
垣さんにとって、その言葉は
あまりにも衝撃的だった。

「相手は、近所に住むピアノ
の上手なひとつ年下の女の子
でした。週末に家に帰ると、

家の近くの学校で、一緒にピ
アノを弾いていました。ショ



伴奏者であるピアニスト・木村さんの肩を借りて、ステージへ。右手に抱えているのは点字の譜面



今年12月14日、東京国際フォーラムにて、コンサートを予定



パンのノクターンを教えても
らったこともありますね」
「そんな深い思いを募らせて
いた中学2年生のとき、唯
一、心の支えだった祖母が他
界してしまう。

「祖母は脳梗塞で倒れてから
死ぬまでの3ヶ月、ずっと家
で寝ていました。入院するお
金がなかつたからです。寝た
きりですから、床ずれができ
てしまふ。」

あまりに悲しすぎて涙が出て
かつた。火葬場で焼かれてい
く祖母を肌で感じながら、新
垣さんは自分の生き立ちを覗
きなかつたんです……」

祖母が息を引き取ったとき、
「まだま聞いていたラジオ
から、祖母が好きだった贊美
歌が音楽だった。

「どうぞ、教会に行ってみ
よう」と

「井戸に飛び込もうとした瞬
間、たまたま通りかかった友
人に止められてしまつたんで
す。でも、それが逆につらく
てね。僕は死ぬこともできな
いのか、つて……」

（なぜ自分だけが、こんな不
幸な目に遭わなければならな
いのか。どうして自分は、こ
の世に生まれてきました
んだろうか）

「同情もせず、ひと言もおつ
しゃらずに、ただ話を聞いて
一緒に泣いてくださつたんで
す。自分のような人間のため
にも、泣いてくれる人がい
る。瞬間、心の底から救われ
たような気がしました」

まさに心と心との出あいだ
つた。

「君の声は、日本の人離れ
してゐるね。オペラに適したラテ
ン的な明るい響きを持つてい
る父がメキシコ系アメリカ人

高等部を卒業した74年、牧
師の道に進むべく東京キリスト
教大(現・東京基督教大)
に進学。3年後には西南
学院大学神学部に編入した。

そんな新垣さんに転機が訪
れたのは大学4年生のとき。
それは世界的に有名なボイス
トレーナーとして知られるア
ンドレア・ブランドー氏と
の出会いだった。彼の来自を
知った新垣さんの足は、気が
つくとオーディション会場へ
向いていた。オーディション
で新垣さんの声を聞いたバラ
ンドー氏は、「開口一番にこ
ういった」。

「君の声は、日本人離れ
してゐるね。オペラに適したラテ
ン的な明るい響きを持つてい
る父がメキシコ系アメリカ人

